

平成26年11月2日(日)

老球の細道78号

### 魔法の瞬間はない、「弾み車の比喻」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

巨大で重い弾み車を思い浮かべてみよう。金属製の巨大な輪であり、水平に取り付けられていて、中心には軸がある。直径は10メートルくらい、厚さは60センチほど、重さは2トンもある。この弾み車をできるだけ速く、できるだけ長期にわたって回し続けるのが自分の仕事だと考えて見る。

必死になって押すと、弾み車が何センチか動く。動いているのかどうか分からないほどゆっくりした回転だ。それでも押し続けると、2時間か3時間たって、ようやく弾み車が1回転する。押し続ける。回転が少し速くなる。力を出し続ける。ようやく2回転目が終わる。同じ方向に押し続ける。3回転、4回転、5回転、6回転。徐々に回転速度が速くなっていく。7回転、8回転。さらに押し続ける。9回転、10回転。勢いがついてくる。11回転、12回転、どんどん速くなる。20回転、30回転、50回転、100回転。

そしてどこかで突破段階に入る。勢いが勢いを呼ぶようになり、回転がどんどん速くなる。弾み車の重さが逆に有利になる。1回転目より強い力で押ししているわけではないのに、速さがどんどん増していく。どの回転もそれまでの努力によるものであり、努力の積み重ねによって加速度的に回転が速まっていく。1千回転、1万回転、10万回転になり、重量のある弾み車が飛ぶように回って、止めようがないほどの勢いになる。

誰かが質問した。「どんなひと押しで、ここまで回転を速めたのか教えてくれないか」。

この質問には答えようがない。意味をなさない質問なのだ。1回目の押しだろうか。2回目の押しだろうか。50回目の押しだろうか。100回目の押しだろうか。違う。どれかひとつの押しが重要だったわけではない。重要なのは、これまでのすべての押しであり、同じ方向への押しを積み重ねてきたことである。なかには強く押したときもあったかもしれないが、そのときにどれほど強く押ししていても、弾み車に加えた力の全体に比べれば、ごくごく一部にすぎない。

物事の最終的な結果がどれほど劇的であろうと、飛躍は一気に達成されるものではない。飛躍の道は小さな努力の積み重ねによって開かれていく。魔法の瞬間はない。

将来に最高の成果を達成するために何が必要かを認識し、各ステップをひとつずつ進んで行く。弾み車を1回転ずつ回転させていくように。弾み車を同じ方向に、長期にわたって押し続けていけば、いずれ必ず突破の時点がやってくる。

・・・〈ビジョナリー・カンパニー②〉より・・・

UCLA伝説の名コーチ、ジョン・ウッデンは、全米大学選手権(NCAA)で12年間に10回優勝し、ある時には61連勝を記録したことがある。しかし、ウッデンがUCLAのコーチになって、全米大学選手権大会で初優勝するまでに何年かかったか知っているだろうか。答えは15年である。1948年から1963年まで、ウッデンは地道な努力を続け、64年に初優勝にこぎつけた。その後あっという間に7連覇を含み10回優勝。

偉大な人物、チームはいずれも、準備を経て突破にいたるまで、同じパターンをたどっている。弾み車の1回転ごとに勢いを蓄積し、やがて準備段階から突破段階に移行する。

栄光への道は限りなく遠い。「今日」の一步で近づく。